

平成 26 年度第 1 回会計学教育 FD/ICT 活用研究委員会議事録

- I. 日時：平成 26 年 6 月 21 日（土）18：00～20：00
- II. 場所：私立大学情報教育協会 事務局 会議室
- III. 出席者：岸田委員長、松本委員、阿倍委員、金川委員
（事務局）井端事務局長、森下
- IV. 検討事項
 1. 平成 26 年度委員会活動の進め方について
 - ・ 能動的学修実現に向けた効果的な取り組み方策の研究について
 2. 対話集会に向けた今後の研究の進め方について
 3. その他
- IV. 議事内容
 1. 前回議事録・配布資料の説明
 - ・ 資料①②③、参考資料 1, 2, 3, 4, 5, 6 について説明される。
 - ・ 前回議事録を阿倍委員が記述したものに差し替える。
 - ・ 組織を成長させる会計を研究していくべきである。（従来の簿記、会計手続きを中心としたものではない）
 - ・ 形だけのアクティブラーニング(AL)ではなく、基本的なところから見直す。
 2. 能動的学修実現に向けた効果的な取り組み方策の研究について
 - ・ 会計教育の方向
 - ・ 会計教育の方法
 - ・ 会計教育の内容
 - ・ 研究テーマについて
 - ・ 次回の宿題
- (1) 会計教育の方向
 - ・ 学部 of 学生に倒産リストを見せている。
 - ・ 税理士は不況業種であるので、簿記専門学校に行かない。
 - ・ 公認会計士の受験生が減少している。受験生の質が下がってきている。
 - ・ 職業会計士教育ではなく、自分たちで実際に会計数値をみて考えさせることができるように教育したい。
 - ・ 文学部の女子学生に会計を教える方法を考えている。
 - ・ 簿記（炊飯器の構造）から入ると会計嫌いになるだけである。決算数値をみて判断する方向（炊飯器の構造を知らなくてもご飯は炊ける）から入るべきである。
 - ・ 就職活動のとき、会社を選ぶ基準、ブランド名でなく、公開情報のかなり部分が会計情報であり、従業員数の増減をみるだけでも違うところから話し始める。
 - ・ 実務の経験がない教員では、倒産の予測のような授業はできない。
 - ・ 簿記の教科書を教えているだけの教員では、困難である。総合学習の二の舞になる。
 - ・ 大学は専門学校ではない。専門学校は会計関係から公務員試験にシフトしている。
 - ・ 現在、会計処理はコンピューターがしている。学生が「何のために会計をするのか？」という反応をする。
 - ・ 従来型の会計手法の発想では無理である。
- (2) 会計教育の方法
 - ・ 決算書をみて会社の状況（就職してもよいか）を考えさせる。
 - ・ 大学の就職課に会計を理解している人員はいない。イメージだけで斡旋している。ゲリラ的に会計知識を広めていく。
 - ・ 財務諸表論の中で教えていくのか？この場合担当者本人の意思決定である。私には無理だと言われればそれまでである。
 - ・ 戦略会計という言葉を作りたい。組織維持、成長、発展して、さらに多くの投資を行う。戦略会計という立場から今の会計を見直すという検討ができないか。経営という立場から会計の上でどういうことを配慮すればよいのか？

- ・ 実践的な会計にする。できる人は少ない。カリキュラムを替えるだけでは無理である。
- ・ 新しい視点で会計をもう一度見直す。身近な問題として会計を捕まえるようにする。
- ・ 今年1年はこれをテーマに議論して、来年に対話集会をする。今年に対話集会をしない。
- ・ ムークに載せる。反転授業もその中に組み入れる。議論しながら何人かで組んで行う。
- ・ 授業を10分で話して、残り5分でまとめる。10分で本質的な話題を投げかける。学生に考える時間を与える。間をおいて勉強させることが大事である。
- ・ ムークを皆でやってみよう。テーマを科目ではなく、「危ない会社の見分け方」などにしてはどうか。

(3) 会計教育の内容

- ・ 会計情報を使って戦略思考ができる。すでに知られている戦略会計でなく、言葉をかえて行う。
- ・ 売上原価だけでなく、数量を考慮に入れて、効率をみるというような考え方を教えることが必要である。
- ・ 大企業でなく、中小企業の方が適切なデータを表示しているので、お願いして提供してもらっている。
- ・ 大企業の決算書は読めないが、中小企業の決算書はなかなか出してもらえない。
- ・ 公表財務諸表を取り扱うことはやめて、ビジネスをするために必要な会計の知識を身につけさせる。
- ・ ①取引先が信頼できるかどうか、②この会社と掛け取引をしてよいかどうか、等言う内容である。
- ・ 経営のもっと泥臭いこと：例えば、会社が登記している、このことによって会社の謄本がわかる、代表者がどこに住んでいるかわかる。役員の住所、土地、建物の謄本をとれば、担保に入っているかどうかわかる。どの程度の借金があるか、町金融がはいっている場合、これをどう考えるのか。しかし、これは会計学ではない。
- ・ 全く会計を勉強していない学生に、経営に役立つ会計を教えるためには、どこから入っていけばよいか？カリキュラムの積み上げから入ると、学生はいやになる。
- ・ 有価証券報告書から入るという方法もあるが、決算書が読めないのではかわからない。
- ・ どのような切り口から入ればよいか？
- ・ 簿記の授業で資産・負債を理解している前提で、オリエンタルランドの決算書をみせて、シンデレラ城はどこに、ミッキーの衣装はどこに載っているのかを考えさせる。
- ・ 簿記4級レベルの簡単な例を見せる。利益はいくらかと質問する。学生が関心を高めたところで、利益とは何か、利益は資本の増殖という定義をした後に、システムティックに表で記録する。二面的に計算できることを示す。しかし、簿記に入るとわからなくなる。
- ・ 飲み屋の店長の例で、収入・支出を計算させて、この段階で損益分岐点を教えて、理解させる。損益分岐点は役に立ち、応用もきく。
- ・ ビジネスを始めて、ある程度軌道に乗るまでをストーリーとして、シナリオを作って、そのプロセスで現金主義会計を教えていく。
- ・ コスト概念なしでビジネスを始めて、ほとんどそれをつぶれている。
- ・ 以上のような考えで、10分のモデルを作成する。ムークは1週間に110分位、1週目に5,6本用意する。それを4週する。240分、60分が4本。6かける4本で24本。その間に課題を出す。
- ・ ゼミなど少人数で実験を行う。

(4) 研究テーマについて

- ・ 研究テーマをどうするのか？
- ・ 「戦略的思考を培うための会計教育」「サルでもわかる会計学」
- ・ イメージを「会計戦略思考の実践」
- ・ LINEの森川社長は、予測できないので事業計画を作らない、コストを考えずに事業価値を優先するという逆転の発想である。
- ・ それはマーケティングの世界である。会計が表に出てこない。会計をいうと話が小さくなる。
- ・ 固定費・変動費の発想と取引先の倒産リスクを読めるだけで十分である。ビジネスマ

- ンの必須アイテムになる。
- ・ 会計は出てくる数値しか見ていないので裏側の仕組み、ビジネスマンの姿勢よりも、取締役のための質問を逃れるための仕事になっている。本末転倒である。
 - ・ 会計は戦略ではなく、戦術であり、ツールである。
 - ・ 戦略に格上げするのであれば、会計の知識のない人にどのように会計を教育するかが戦略テーマである。具体的にはムークなどを使う戦術レベルの教育である。「国民に会計を普及させる云々」というテーマになる。
 - ・ あえて戦略という用語を使うのであれば「戦略をサポートするための会計」である。
 - ・ 経営者がどこまでリスクをおかしていいのか、経営者の意思決定をどこまでサポートできるのか。
 - ・ 今までの会計教育のあり方そのものとは全く違い、会計を活用して組織を維持発展させるためにひとつの転換点の教育を考えなければならない、ということを確認した。今年の残りのあと2回で、検討事項が見えてくればよい。
 - ・ 社会人を対象にした教育でよい。体系だった領域の教育とは競合しないように、新しい領域を作ってみようということ始める。
- (5) 次回の宿題
- ・ 次回の宿題について、倒産回避のための会計、「損益分岐点をクリアしなければいけない」などをピックアップ、起業のための会計、「必要な運転資本をどのように計算するか?」「この資金を維持しないと経営が困難になる」。
 - ・ 「起業して倒産しないための会計」というテーマで、どのような筋書きの教育を考えるか、教育の進め方のイメージを持ち寄る。
 - ・ 会計委員会是对話集会をしない。
 - ・ 次回委員会、8月23日(土)。

以上